

国語

(全13ページ)

注意事項

- 一 受験番号、氏名および解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 二 問題用紙に解答を書き込んでも採点されません。
- 三 字数制限の設問については、特別な指示がない限りは、、や「などの記号を字数に含めます。

例

こ	こ	が	、	「	私	の	母	校	」	と	な	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

(計十四字)

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これからの教養とは無論、インターネットにある雑多な情報の集合体ではありません。情報を論理的に体系化したものが知識とすると、これからの教養は書齋型の知識でなく、現実対応型のものでなくてはなりません。現実対応型の知識とは、屍のごとき知識ではなく、生を吹き込まれた知識、情緒や形と一体となった知識です。

ここで言う情緒や形とは一体何でしょうか。まず情緒ですが、ほぼ先天的に備わっている喜怒哀楽ではありません。それなら獣にもあります。より高次元とも言える、後天的に得られるもの、すなわちその人が生まれ落ちてからこれまでにどんな経験をしてきたか、によって培われる心です。どんな親に育てられたか、どんな友達や先生と出会ってきたか、どんな美しいものを見たり読んだりして感動してきたか、どんな恋や失恋や片思いをしてきたか、どんな悲しい別れに会ってきたか……などにより形成されるものです。美的感受性やもののあわれなどの美的情緒、宗教によって得られる宗教的情緒なども含まれます。

また形とは、日本人としての形、すなわち弱者に対する涙、卑怯を憎む心、正義感、勇氣、忍耐、誠実、などです。論理的とは言えないものの価値基準となりうる、獣ではない人間のあり方です。こう書いてくると、これからの教養とはプラトンやカントまで、様々な哲学者が語った知情意や真善美に似ています。これらを荒っぽく要約すると、知(真)が知識、情(美)が情緒、意(善)が意志や道徳ですから、私の言う教

養、すなわち情緒や形と一体になった知識、とはそれらに近いと言えます。

漱石も『草枕』の冒頭で言っています。「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」。バランスが大切ということでしょう。一人前の人間として大切な教養については、人により言い方が異なります。東京女学館女子中高の校長をしていた四竈経夫先生は、「私が生徒にどうしても伝えたいのは三つのこと、読書と登山と古典音楽の愉しさです」と私に語りました。ある会社の社長は「人間にとつて最も大切なのは、人と付き合い、本を読み、旅をすることだ」と言いました。塚治虫はこう言いました。「君たち、漫画から漫画の勉強をするのをやめなさい。一流の映画を見ろ、一流の音楽を聴け、一流の芝居を見ろ、一流の本を読め。そしてそれから自分の世界を作れ」。表現は様々ですが、大体、私と同じことを言っているように思います。

ニーチェは「本をめぐることばかりしている学者は、ついにはものを考える能力をまったく喪失する」と言いました。知識が充分にあるだけでは、死蔵された知識に過ぎず、考える能力に結びつかないのです。

これからの教養を構成するものは、情緒や形ばかりか知識も、基本は実体験によって得られるものです。京都がどんな町かは、京都に行つて見なければ完全には理解することはできません。象やキリンがどんな動物かも、何らかの方法で見ることがあります。モーツァルトやビートルズの音楽がどんなものかは、聴く以外にないのです。ぶたれた時の痛さ

も、貧しくて十分に食べられない悲しさや苦しきも、仲間外れにされる辛さも、欺だまされたり裏切られた時の悔しさも、そんな目にあつて初めて分かります。自分自身の体験によつて、そういう目にあつている人に同情したり、他人をそういう目にあわせないよう心がけることになります。

ここで大問題^③は、十分な知識や情緒や形を得るために、実体験だけで足りるかということです。一生の間に実体験できることはとても限られています。自らが生涯しやうがいのに歩いた道路の長さの総和は、世界全道路の長さの兆分の一にもなりません。出会った人の数だつて限られています。言葉を交かした人の数はさらに少なく、深い意志の疎通そつうを交した人の数ともなると、大抵の場合、家族を除くと片手の指、多くても両手の指で足りてしまうのではないのでしょうか。

にもかかわらず私達は、人間とはこういうものだ、こういう状況ではこう考え、こう思い、こう行動する、というかなり正しいイメージを持っています。これを持たないと社会生活ができません。私達が、よく知る人はたった数名なのに、そんなイメージを持つことができるのは、映画やテレビドラマや読書などで、乏しい実体験を補強しているからです。家族や学校で親や先生に教わる知識だつて、ほんの基礎基本だけです。人間として真つ当で充実した生き方をするためにはとても充分とは言えません。これからの教養、すなわち情緒や形と一体化した知識を獲得するには、まず自ら努力して得る必要があります。実体験では余りにも足りないのです、間接体験（追体験）によることになります。読書、文化、芸術などに親しむことが大切となるのです。人によつては自然や宗教も

あるかも知れません。先ほど京都がどんな町かは京都に行つて見なければ分からないと言いましたが、注意すべきは、それでは目に見えるものしか分からないということです。

例えば京都の金戒光明寺こんかいこうみょうじは、何も知らない人にとつて、京大近くの丘の上のただっ広いお寺に過ぎません。A 書物をひもとけば、ここは、十五歳より比叡山ひえいざんで修行を積んでいた法然上人ほうねんじやうじんが、四十三歳の時に山を下りて草庵そうあんを結んだ地であり、初めての浄土宗寺院じやうどしやうじんであることが分かります。B、十四歳の美少年平敦盛たけのあつもりの首を斬きつた熊谷直実くまがいなおざねが、出家しようと法然の教えを受けに来た所と分かります。

a バクマツには京都の治安を保ち孝明天皇こうめいてんを守ろうと、京都守護職として会津武士あいつぶし一千名がここに滞在したことも分かります。御所まで二キロ、東海道の京都人口である粟田口あわたぐちまで二キロ、という警固上の絶好の位置にあることも分かります。京都を京都たらしめている歴史や文化を知つて、初めて京都とは何かが分かるのです。

読書を代表とする疑似体験は、実体験に比べれば概して深さも強烈さもはるかに小さく、人間の教養を豊かにする力としては微々たるもの、という声が聞こえてきそうです。その通りです。力としては十分のいかも知れません。しかし、一つ一つは十分の一の深さや強烈さの疑似体験でも、自ら求めさえすれば実体験の百倍に上る回数を体験することも可能です。そうすれば実体験だけの人に比べ十倍の教養を得ることができることになります。

特に疑似体験の柱となる読書なら時間も金もさほどかかりませんから、

いくらでも重ねることが可能です。読書を通じ、古今東西の賢人や哲人や文人の言葉に耳を傾けることができます。漱石やドストエフスキーの言葉に耳を傾け、紫式部や清少納言やシェークスピアと親しく対面することもできます。文庫本代をハラウだけで、あり得ないようなオンラインを受け取ることができるのです。

ポジシオントークがしかなない政官財の人々や、テレビでもっともらしいことを自信満々に語る人々でなく、幾歳月にわたる歴史の星霜に耐えた、古今東西の賢人達の精魂こめた授業を、タダで聴講することができるとです。知識や思想を吸収できます。文学書を読めば古今東西の庶民の哀歌に触れることで人間としての美しい情緒や、醜い情緒を学ぶことができます。それらに共感し、時には涙し、時にはフルイ立つことさえできるでしょう。

(中略)

また、歴史や文明や文化に関する本を読むことで、世界史の中における現代の立ち位置、日本の立ち位置、そして究極的には自分の立ち位置が少しづつはつきりしてきます。立ち位置が確立されないと毎日見聞する社会現象を大局的に見ることができません。

本を読まない人間は井の中の蛙と同じになります。この蛙にとって、世界は井戸の底と上に見える小さな丸い空だけです。井戸の外を一切知らなくても蛙は幸せな一生を終えることができるのかも知れません。しかし私は、この蛙に広い広い世界を見せてやりたくてたまりません。実体験だけで満足する人は、一度しかない人生をじっと井戸の中で暮らす

ようなものです。

こうして実体験は疑似体験により補完され、健全な知識と情緒と形、すなわちバランスのとれた知情報が身につきます。これこそがこれからの教養であり、あらゆる判断における価値基準となります。別の言葉で言えば、あらゆる判断における座標軸が形作られてくるのです。哲学を中心とした「生とは何か」を問うのがかつての教養で、「いかに生きるか」を問うのがこれからの教養と言ってもよいかも知れません。

(藤原正彦『国家と教養』より 一部中略)

問一 二重傍線部 a ~ d のカタカナを漢字で書きなさい。なお、送り仮名が必要な場合はその部分をひらがなで書きなさい。

問二 傍線部①「死蔵」・傍線部④「概して」の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---------------|--------|
| ① 死蔵 | ④ 概して |
| ア しまったままにすること | ア 目立って |
| イ 一つのまにかなくすこと | イ なぜか |
| ウ 取り出して処分すること | ウ 一般に |
| エ 持ち主がいなくなる事 | エ おそらく |

問三 傍線部②「京都がどんな町かは、京都に行つて見なければ完全には理解することはできません」とあるが、この内容について筆者

が気をつけなければならないと述べているのはどういうことか。

それについて説明した次の文の空欄にあてはまる語句を、本文中

から〔X〕は七字で、〔Y〕は五字で抜き出して答えなさい。

寺などの〔X〕だけではなく、〔Y〕についても知らなければ、

京都について完全に理解できたとはいえない。

問四 傍線部③「大問題」とあるが、筆者はこの問題に対してどうする

必要があると述べているのか。理由を含めて七十字以内で説明しなさい。

問五 〔A〕・〔B〕にあてはまる語句として最も適当なものを、

それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア また イ なぜなら ウ 要するに
エ ところで オ たとえば カ しかし

問六 本文の内容と合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 漱石が『草枕』の冒頭で言っているのは、人の世を生きていくためには人間関係のバランスをうまくとっていくことが大切だということである。

イ 毎日見聞する社会現象を大局的に見ることはできれば、世界史の中における現代の立ち位置や日本の立ち位置、そして自分の立ち位置がはつきりしてくる。

ウ 手塚治虫は、漫画の上達に必要な心構えとして、漫画を描くことだけにこだわるのではなく、他分野の芸術作品も生み出そうとするべきだと述べている。

エ これからの教養を構成する知識は、ただ雑多にあるようなものではなく、情緒や形と一体化し、考える能力に結びつく現実対応型のものである。

オ 実体験によって知識を得ようとしなない人は、井戸の底と上に見える小さな丸い空しか知らないまままで生きようとしている蛙のようなものである。

問題は次のページに続きます。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈この場面までのあらすじ〉

弓道部の篠崎凜は、試合会場で出会った波多野郁美に頼まれ、彼女の出るドキュメンタリー番組に対戦相手として出演することになった。今その番組が放送されようとしている。波多野は女優を目指しており、弓道は「見せるためのもの」でかっこいいからやっている、かつて凜に告げた。

番組が始まった。日曜の朝七時という時間なので、何か理由でもない限り観ることはない時間だ。試合や何かのイベントがあればその準備をしているし、そうでなければ昼まで寝ている。

『スポ魂』——しっかり観たことがなかったので「すぽこん」なのかなと思っていたが、すぽたま、と読むらしいことは今回の収録が決まって初めて知った。

当然タイマー予約してあるのだが、母だけでなく父までちゃんと着替えてテレビの前で待機しているので、凜は何だか居心地が悪く、いつそのこと後で一人で観ようかとも考えたほどだ。しかし、父は多分みんなと一緒に観たいのだろうと分かっていたので、三人掛けのソファを半分占領するその暑苦しい身体からなるべく距離を取りつつ、画面に意識を集中する。母は、ソファには座らず二人の間でカーペットに横座りしていて、父の膝に肘をついている。仲がいいのはいいことだと思うが、何かというとベタベタしているのがこそばゆい。

『無敗の弓道女王にライブ登場!』

派手なテロップが躍り、もう既にげんなりしはじめた。自分は「ライブ」の方だからまだまじだが、「弓道女王」とか呼ばれる側だったらとても観ていられない。あの人はきつと平気なんだろうけど。

凜は、自分はいくらでも脇役、当て馬なんだから出番は少ないだろうと思っていたのだが、女王の方は既に番組でお馴染みだということなのか、先日の試合に始まり、凜の授業風景、練習風景と続いて、今回に限っては凜に強くスポットを当てた作りだった。

「このカメラマン、プロのくせに下手なんじゃないか? 中田って子の動画の方が可愛く撮れてるよな?」

「そりゃね、気持ちが出るもんでしょ、好きな子を撮るときには父が漏らした文句に、母がまたいらぬことを言い添える。」

「なんだって? あいつとはつきあつてないって……」

「うるさいな、もう! 静かにしてて!」

話題が変な風にならないよう、慌てて釘を刺す。

「……ああいうなよとしたのは、俺はあんまりなあ……」

小さい声でなおも続けるのでじろりと睨みつけると、ようやく口を閉じてくれた。番組に気を取られてる間に忘れてくれればいいのだが。——ていうか、「好きな子」って何だよ。一体あいつの何を知ってるって言うの。そう思い、今度は母の後頭部を睨みつけたが、もちろん気づきもしない。後でちゃんと誤解を正しておかねば。

そう考えながらテレビ画面に意識を戻したものの、父の言うとおりの

だか自分の映り方がいつも以上に地味でもつきりしているように観えて、改めて考え込んでしまう。これは一体何だろう。同じ画面で生粋のお嬢様と見比べてしまうからだろうか？ それともやはり中田は凜のベストの表情を選んで撮影したり、悪いのはカットしたりしているのだろうか？

分からなかった。何にしろビジュアルやファッションで波多野と張り合うつもりなどないのだからどうでもいい。特に貧乏くさくは見えていないことにとりあえずほっとする。

ルールが説明され、試合が始まる。テレビにしては真面目な方の番組らしく、さほど煽らない淡々としたナレーションと共に、波多野と凜の射を色んな角度から見せる。結果はもちろんとうに分かっているし、中田の撮ったビデオも繰り返し確認させてもらったけれど、それでもやはり凜は息を止めて見入ってしまった。

最初の二手(四本)は特に、自分でも惚れ惚れするような気合いの入ったいい射だった。対する波多野郁美はやはり、きれいで精密だけれど、それ以上の「何か」はない。しかし、たくさんの射を見ている人間でない限り、二人の射の違いなど分からないだろう。現に、ある程度は見慣れているはずの父でさえ、「やっぱこの子はすごいなあ。矢が全部真ん中だもんなあ。そりゃ勝てなくてもしょうがないよ」と敵ながらあっぱれとばかりに感嘆している。

結果を知っている本人でも(本人だからか?)息詰まる射詰が延々と続く。途中ダイジェストになるのは時間の関係上仕方なかったのだろう

が、もしそのまま観せられたらこちらの神経も持たなかったかもしれない。十六射目で遂に凜の矢はわずかに上に逸れてしまったところで、「女王勝利!」の文字が躍った。父は残念そうに呻き声を上げ、凜の肩に手を回して抱き寄せようとする。抵抗したが、ぎゅっと抱きすくめられ、頭をじゃりじゃりとこすりつけられる。

「よく頑張った! すごいよ。この間の試合もすごかったけど、これはもっとすごい!」

「いいってば。もういいからやめて! 暑苦しい」

渾身の力で押しのと悲しそうな顔で身を引く。

現場で生で見ていた母でさえ、「凜の射の方が好き」とは言ってもくれなかった。違いが分かるのは恐らく極めて限られた人間だけだ。いや、やはりこれは、射品の問題ではなく、趣味の問題なのかもしれない。テレビのスタッフも、ほとんどの視聴者も、凜の「健闘を称え」つつ、波多野に喝采を送ることだろう。

果たして波多野は、これを観てどう思っただろうか? 自分の射を繰り返しビデオで観て「完璧」を目指してきた彼女は、これで満足しているだろうか?

分からなかった。射品とは何か。射格とは何か。そもそもそんなものは本当に存在するのか。矢が的に当たるといふ誰にも見聞違いのような事実の前で、そんな言葉は余りにも頼りなく思える。

波多野の射は、いわゆる「中射」なんかではない。もっと体配もいい加減で、着装も乱れていて、早気で、しかし射れば百発百中という人

もいる。そういう人をこそ「中て射」と言うのだと思うが、それとは全然次元の違う、美しく整った射ではある。でもそこに、心はない——ような気がする。そう、もしも彼女が女優になり、弓道女子を演じることになってドラマであの射をしたなら、何も文句はないだろう。よくぞここまで美しい射を見せてくれた、と。それはまさに彼女が目指す「演技の弓道」としては完璧なものかもしれない。

でもこれまで、凜が憧れ、感動したような射とは決定的に何かが違うような気がするのだ。

力衰え、視力を失いながらもなお的前に立ちたいと思う棚橋先生の射には感動したし、その射を目に焼き付けようと思った。いつかの試合の前の演武で見た範士の先生の射も、忘れられない。ただ正確で上手い射など、記憶にも残らないし、ましてや感動とはほど遠い。

——しかしそれは、自分が波多野をライバル視しているから、あえて過小評価しようとしているのではないかと言われると、どうにも自信が持てない。中田が「君の射の方が好きだ」と言った言葉に誘導されている面もあるかもしれない。射品では負けていない、なんてただの負け惜しみのような気もする。正しい射は中たるはずなのだから、少なくとも最後に外れたあの一本は正しい射ではない、とも言える。

分らない。映像を見てみると自分の射は間違っていないような気もするのだが、それで負けた悔しさを誤魔化していちゃいけないような気もする。

やがて今度は場面が変わって、試合後に行なわれた波多野郁美と

のカフェシーン。お互いリラックスした様子で笑い合ったりしているように見えるが、実際には（少なくとも凜の方は）終始ピリピリと緊張しまくっていてリラックスどころではなかった。編集の魔術か、数年来の友人同士に見えないこともない。波多野の服装も、凜に合わせたつもりなのか本人の演出なのか、ダメージジーンズにロックスターか何かららしいグルーヴのTシャツで、さほどの「格差」はないように見える。

——一言で言って波多野さんにとって弓道とは何ですか？

画面には映っていないディレクターの質問が、テロップで表示される。
『えー』

波多野郁美は、まるでそんな質問されるとは思っていなかった、というように困惑した笑みを浮かべる。もちろん、収録が始まる前から教えられていた質問だが、とてもそうは見えない。

『よく考えるんですけどね、むっつかしいなあ……。まあでもやっぱり、人生そのもの、としか言いようがないですよ。何だか、生きる目的のようでもあるし、弓をすること自体が生きてるってことのような気もするし。射□人生で言うけど、結局そうとしか言いようがないんですよ、わたしにとっては』

——そこまで波多野さんを惹きつける弓道の魅力とは何でしょうか？
腕を組んで考え込む波多野。

『何なんですよ。道と名がつくものの中でも、ここまで自分自身——心だけでなく身体とも向き合うことを強いられるものってないんじゃないでしょうか。多分それが、一番の魅力でもあり、難しいところ

でもあるんじゃないかと思えます』

事前に彼女の本音を聞いていなければ、我が意を得たりとばかりに大きく頷いたことだろう。親友になれる、と思ったかもしれない。凜がずっと言葉に出来なくてもやもやとしていたことをすばつと言いつわわしたような言葉だったからだ。しかし、そんなことを思ってもいないはずの波多野に言われてしまうと、逆に間違っているような気さえしてくるから困ったものだ。

そして、同じ質問が今度は凜に向けられる。

——。では篠崎さん。一言で言つて、篠崎さんにとって弓道とは何ですか？

質問も、その順番も、すべてが仕組みられたものではなかったのかという気がしていた。誰が仕組んだのかは分からないけれど。波多野が先に凜の言いたいようなことをすべて言ってしまったのでは、凜としては「わたしも全く同じ気持ちです」と言うか、無理矢理別の言葉を探すしかない。余程のことを言わない限り、波多野の印象を超えることなどできないはずだ。もちろん、テレビカメラの前で気の利いたことを言いたくないどと思つているわけではない。しかし、自分にとって重要な質問に対し、はつきりとした答えを出しておきたいという気持ちは確かにあつて、波多野の返答——心にもない返答だ——は、そんな凜の心をぐらつかせるのだった。でもこの時既に、何と答えるかは決めていたから、さほどの動揺はなかったはずだった。緊張の余りぎこちない喋りなのは仕方ない。

『……あ、えっと、すみません。ずっと考えてるんですけど……正直分

からないんです。何で弓に惹かれたのか、何でこんなに一所懸命やつてるのか、分からないんです。頭が悪いんですかね』

自虐的な笑い。今自分で観て、余計なことを言つたと激しく後悔する。全然面白くもないし、余計頭が悪く見える。

でもそれ以外は今でも間違つた答とは思っていない。分からないものは分からない。それ以外どう言えと言うのか。最初から「〇〇を一言で言うか？」という質問自体くだらないと思つていたはずなのに、いざ聞かれると、無理矢理にでも答えなければならぬものだと思ひ込んでいた。心のどこかに、すばつとそれらしいことを言つて誰かを感心させたという気持ちがあつたのか、それとも逆に、何とか言葉にすることで分かりにくい何か分かるようになるのではないかという思い込みがあつたのか。

③ 考えて考えて、考えているうちに、そんなものは錯覚なんじゃないか、とはたと気づいたのだった。

弓道の教本にしたつてそうだ。射法射技や心構えについて、微に入り細を穿つて説明されているが、初心者には何が書いてあるかほとんど分からない。どれほど丁寧④に書かれた文章でも、それを読んだだけですぐ弓が引けるようになる人などいない。しかし、ある程度のことが出るようになってから教本を読むと、途端に文章の意味が頭に入ってくる。すべてが納得できる。そして、自分がまだ実践出来ていない部分については、相変わらずよく分からないままなのだ。

分からない人間が、言葉を見つけたところで分かるようにはならない。

それはむしろ言葉に意味を押し込めているだけだ。自分にとって弓道とは何か、ほんやりとでも分かったなら、それを言葉にすればいい。一言か、原稿用紙百枚か、分からないけど。

収録の後、結局凜は波多野に請われてケータイのメールアドレスを交換したものの、確認のために交わした以外、メールは来ていない。そもそも、メール交換する間柄だ、とテレビカメラに見せたかっただけなのだろう。

もしかしたら番組放送後、何か言ってくるかもしれないな、と予感していたものの、結局その日は何も来なかった。特段の感想はなかったのかもしれない。

(我孫子武丸『凜の弦音』より)

問一 二重傍線部 a ㄱ c の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 傍線部①「きれいで精密だけれど、それ以上の『何か』はない」とあるが、凜が感じたのはどういうことか。五十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「射□人生」は「しゃそくじんせい」と読む弓道の世界で用いられる言葉である。空欄にあてはまる字として最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 速 イ 即 ウ 促 エ 側 オ 束

問四 傍線部③「はたと気づいた」とあるが、凜はどういうことに気づいたのか。最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弓道を一言で言うとうなるかをすばと答えられても、誰も感心してくれないということ。

イ 自分が弓道において、基本を知り、ある程度のことが出るようになったということ。

ウ 分かりにくいことは、何とか言葉にすることで分かるようになるということ。

エ 分からないことを無理に言葉にしたとしても、それで理解が深まるわけではないということ。

オ 弓道の教本で、射法射技や心構えについて読んだことで、弓が引けるようになったということ。

問五 本文中で凜が射について考えたり感じたりした内容として適当で

ないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 波多野との「試合」での最初の二手は特に気合いの入ったいい射だったが、そう感じるのは射品というよりも凜の趣味としての感覚によるのかもしれない。
- イ 矢が的に当たるかどうかというのは誰にも見間違いようがないのに、それよりも射品や射格というものを主張するのは心もとなく感じられる。
- ウ 波多野の射を過小評価することによって自分は波多野をライバル視できているが、射品では負けていないというのは負け惜しみのような気もする。
- エ 教本の内容は、初心者に実践させるといよりは、ある程度のことが出るようになった人に、実践できる部分をよく理解させるようなものである。
- オ 言葉から理解しようとするのではなく、自分にとって弓道とは何かを少しでも理解したときに、その内容を、分量にこだわらず言葉にすればいい。

問六 作品の表現の特徴について説明した文として適当なものを、次の

ア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。解答順は不問とする。

- ア 文語調を基本とし、さらに漢語表現を多用することによって、表現のみならず内容にも格調高さを生んでいる。
- イ どの場面でも凜と波多野という二人の登場人物を対照的に描き、物語の構造を明確化したうえで話を展開している。
- ウ 場面ごとに、周囲の風景を詳細に描くことで、自然にその場の様子が思い浮かべられるようになっていく。
- エ 弓道とは関係のない主題を弓道に重ね合わせ、本文中でしばしばその内容を示す^{ひゆ}比喩を用いている。
- オ 凜の視点で出来事や心情を描くことによって、読者が自分自身と重ね合わせながら読めるようになっていく。
- カ 「……」や「――」などの記号の使用によって、登場人物の発言の様子が分かりやすく表されている。
- キ 凜と波多野の射の様子を詳しく描写することによって、二人の心情をそれぞれ浮かび上がらせている。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

フィードバックをする際に内容がネガティブであっても、攻撃する姿勢は厳禁です。それでも学生の中には、「そうだからダメなんだ」など、ついつい相手を酷評してしまうという人がたまにいます。こうなると、言われたほうは、案の定、シユンとなつてしまいます。さらにそれに引きずられるように、そのグループの雰囲気も悪くなりがちです。

ただしこのようなとき、私は落ち込んでいる学生を下手に慰めたりはしません。なぜなら「火のないところに、煙は立たない」からです。つまり、誇張はされて^ウいるかもしれませんが、酷評する相手がそう感じたということは事実であり、少しはそういう部分もある^オ、ということなのです。

このことは、リーダーシップの定義にもかかわってきます。繰り返し述べているように、リーダーシップの一面は「他者に影響を与えること」です。他人にそう感じさせ、酷評したい気持ちにさせたということは、その人はリーダーシップをうまく発揮できていない、ということの証拠だともいえます。

それなら、どうすればいいのか。重要なのは、「相手にはそう見えた」ということを事実として認めた上で、相手のその言葉を自分自身で「前向き・建設的に言い直す」という作業です。つまり、その言葉を自分が改善していただくためにうまく使っていくにはどうすればいいのかを自分でじっくりと考えていくのです。

たとえば、「お前の話、長すぎ。ダラダラとりとめなく話すんじゃないくて、

まず結論から言えよ」と言われて、傷ついたりします。このとき、相手があるあなたの話を「長すぎ」と感じ、不快に思ったのは事実です。では、相手にそう感じさせないようにするには、どうすればいいのか。

このケースでは、実は相手が改善の方向を示してくれています。そうです。「結論から言え」ばいいのです。では、「結論から言える」ようになるには、自分の話し方をどう改善していけばいいのか……このように、相手の言葉をヒントに、自分が改善できる部分を探り、それをどう行動に落とし込んでいけばいいのかを考える、という作業を行っていくわけです。

この方法は、酷評されたときだけでなく、相手からの前向きのフィードバックで改善点を示され、落ち込んだときにも活用できます。いくら前向きのフィードバックとはいえ、自分の行動や発言について、「こうしたほうがいいのでは？」と指摘されるのは、正直、心地よいものではありません。

実際、私自身もそうです。そうした言葉をもらったときは、一瞬、カチンときたりします。「相手からそう見えたのは事実」と頭ではわかっている、なかなか気持ちのほうではそれをすんなり受け入れられなかつたりします。

ただ、それで「あなたに言われたくない」と無視してしまえば、なんら自分の改善に活かせません。学生たちの中にも、改善のためのフィードバックをされ、「たしかにそうかもしれない」と受け入れ、改善に取り組もうとする人たちがいる一方で、「この人は、私の真価を何もわかっていない」と、まったく自分を変えていこうとしない人たちもいます。その場合、当然のことながら、リーダーシップを着々と身につけていくのは、前者の人たちです。

人が何かを学び成長していくというとき、そのもつともよい「教師」は「失

敗」です。教員の立場にいる私がこう言わねばならないのは悔しい面もあるのですが、教員ができることには限界があります。学生たちを本当に成長させるのは、自分の失敗を通して、そこから何かを学ぼうとするときです。

(日向野幹也『高校生からのリーダーシップ入門』より)

(注)

1 繰り返し述べているように…本文以前の部分で述べたことを示す。

問一 傍線部①「厳禁」と同じ構成の熟語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 加熱 イ 基礎 ウ 天授 エ 倍増 オ 抑揚

問二 傍線部②「シユンとなつてしまいます」とあるが、同じような様子を表す慣用句として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 焼け石に水 イ 青菜に塩
ウ 月にむらくも エ 柳に風
オ 玉に瑕きず

問三 傍線部③「落ち込ん」と活用の種類が同じ動詞を、本文中の囲み文字ア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

問四 二重傍線部 a～d の中で、助動詞の意味が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問五 波線部「自分の失敗を通して、そこから何かを学ぼうとする」とあるが、あなたはどのような失敗からどのようなことを学んだ経験があるか。「～という失敗から、～を学んだ。」の形で、具体的に七十字以内で述べなさい。

